

付論 発掘調査成果による止々呂美城の再評価

村 田 修 三

1. 城跡中心部の縄張り

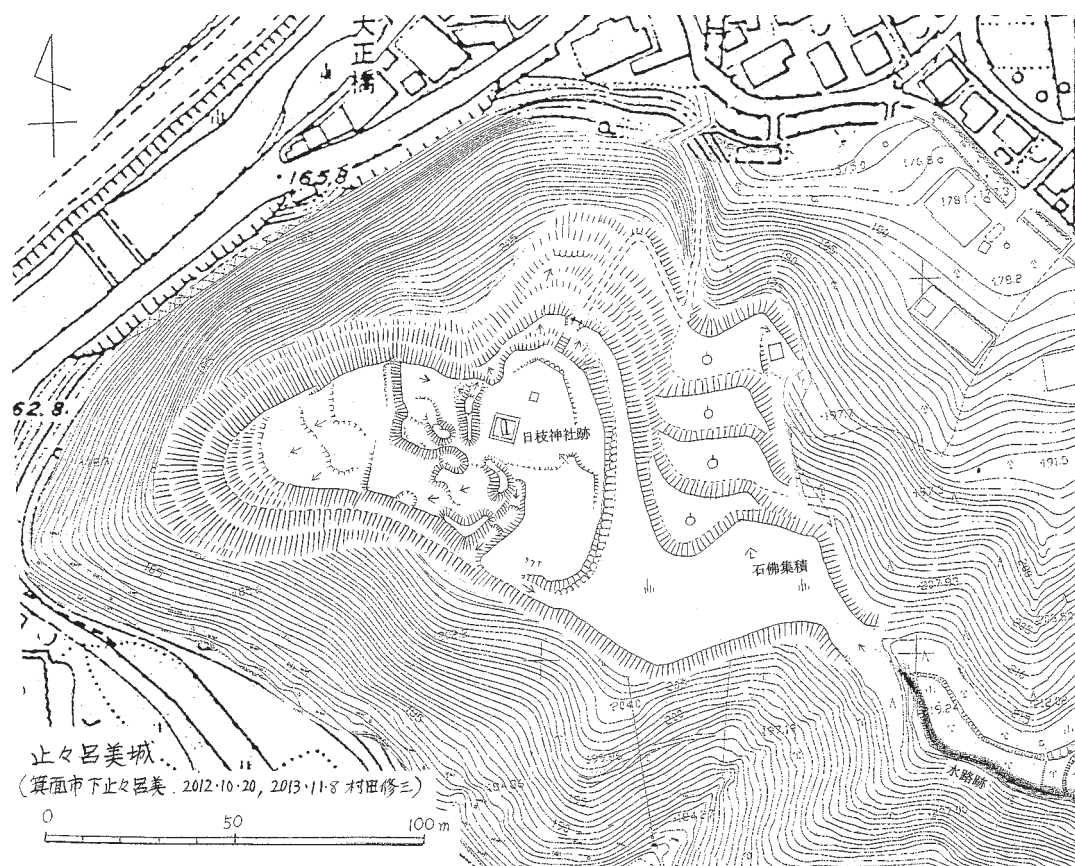
当城は余野川（下流は久安寺川）沿いの河谷盆地の南端、これより先は河岸が断崖絶壁続きになるとい^{きわ}う際に迫り出した尾根上に位置する（第1図）。下止々呂美の日枝神社の旧境内と重複して攪乱されているが、土塁や空堀等の遺構が確認できる。『日本城郭大系』では「塩山城」の名で紹介され、「止々呂美城」は上止々呂美の宮山にあてている¹⁾。その典拠となった『大阪府全誌』には「止々呂美城址は（上止々呂美の）西方天神ヶ尾山に接する宮山是れなり。一に城山とも呼べり。一堆の岡を為し（中略）其の背後は山嶺重疊して」云々と紹介されている²⁾。現地は山裾の緩傾斜地で二段の削平地があり、下の棚田（字「向所」）から仰ぐと「一堆の岡」と見えなくもないが、天神ヶ尾山全体から見ると端末の裾の一部にすぎない。削平地は明治40年に止々呂美神社に合祀された天満神社（天神さん）の跡地だと思われる。神社と城跡が重複しても差し支えないが、この地形では城跡と判断するのは無理である。背後の「山嶺」も含めて「城山」と呼ばれた可能性もあるので、標高294メートルの山頂部を踏査したが、山仕事跡らしいわずかな削平は見られるものの、ほとんど自然地形のままであった。念のためこの山続きで上止々呂美の中心集落「上ノ所」（かみんじょ）を見下ろす複数の尾根を踏査したが、城跡と思しき地形は見出せなかった。それゆえ今回調査対象となった下止々呂美の城跡（伝「塩山城」）以外に止々呂美城は存在しないと判断し、これを地名主義の原則に従い止々呂美城と呼んで、以下考察を進める。

改めて当城の立地を確認することから始めよう。余野川沿いの止々呂美の小盆地が狭まって急崖に阻まれる際に迫り出した比高64メートル（西下川岸との差）の丘上（字「宮山」、便宜上城山と仮称）にあるが、三方は急斜面で東南だけが尾根続きとなる。丘頂は径50～60メートルの卵形の平坦面で、その西は緩い下降斜面が舌状に続き、数十メートルで急斜面に転ずる。平坦面のほぼ中央に方形の基壇跡がある。明治40年に天満神社とともに止々呂美神社に合祀された日枝神社の跡である（第2図）。基壇跡から東方にも平坦面が続くが、急に南北の崖線で比高10メートル近く落ち込む。その東方は最近重機が走ったような耕作地跡が続き、幅狭くなって今回の発掘調査地、すなわち新名神高速道路建設予定地となる。耕作地跡は米軍の空中写真でもほぼ同じ範囲が水田として確認できるが、現在の崖線は垂直に落ちて生々しいので、水田を潰して果樹園にし直すための土木工事をやりすぎて凄い落差になったと思われる。神社の参道の石段の破壊ぶりから、小型の重機をアーム使いで登らせたと見てよい。要するに、山上の平坦地が急激に落ち込んでいることに引きずられて、城域の範囲の判断を誤らない注意が必要である。本来の山容は平坦面から尾根の東のくびれまで徐々に下降していたはずで、この広い範囲内に城域を特定するためには、たしかな遺構をおさえながら慎重に踏査する必要がある。

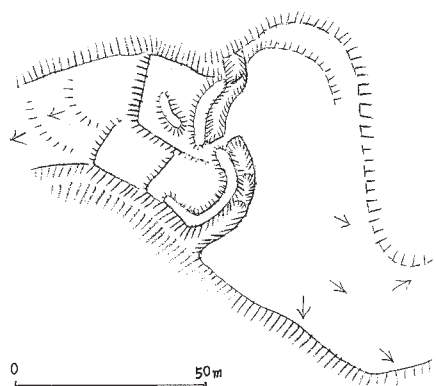
城郭の遺構としてまず目に付くのが、神社の基壇の西から南に断続する土塁、続いてその東南に接して下降する空堀である。空堀の西南端は豎堀状に落ちて平坦面を断ち切っている。土塁と空堀はセットになっていると考えられるので、このラインから西が厳義の城域、すなわち曲輪ということになる。逆に東は平坦地続きでも城外の自然地形ということになる。ここで城域は意外に狭かったのではないかと



第1図 止々呂美城の地理的環境



第2図 止々呂美城縄張図

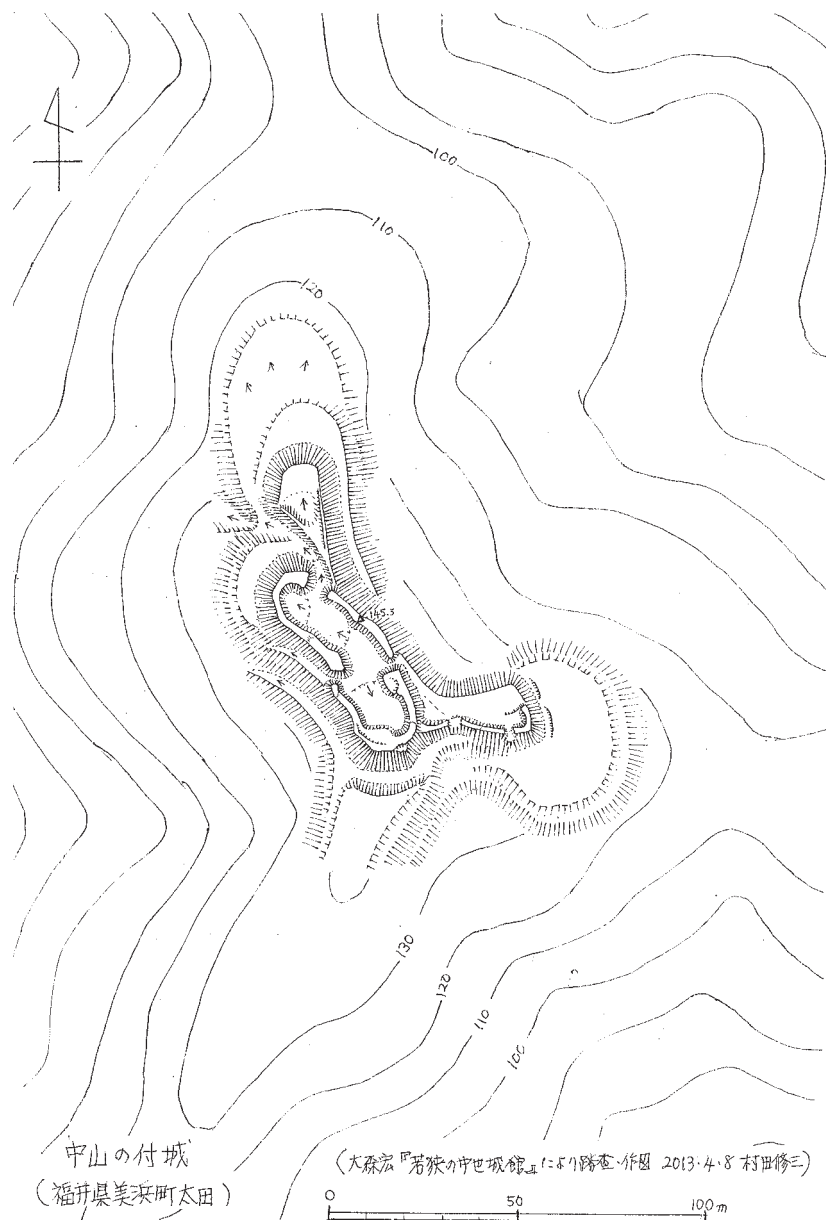


第3図 止々呂美城主体部復元推定図

気付く。北側はどうか。神社の基壇付近が社地造成の際に城の遺構を破壊していたとすると、西側に南北に残る土塁の東側に空堀の存在した可能性が浮上する。そこで土塁の北端付近の崖端線を観察すると、不自然なくびれ落ちに気付く。社殿建設のために空堀を埋めたと想定するとつじつまが合ってくる。発掘しなければ確かめられないことではあるが、明瞭な土塁等の遺構を生かす縄張りはこれ以外に考えられない（第3図）。

外側に空堀、内側に土塁の遮断線を復元想定するとして、そのラインが尋常でないことに気付く。S字形にカーブしているようだが、中央の間隙を無理につなげずに開いたままにしておくと、喰い違い虎口の形に似てくる。北側の土塁（櫓台）と南側の土塁（櫓台）の関係を後ろと前の関係に読み替えて、前後に適当な間隙を保って重なっていたと観察すると、喰い違い虎口の姿が浮かび上がってくる。虎口の防御を、東向きに立ったボクシングの姿勢になぞらえると、右手をジャブ、左手をパンチに構えたファイティングポーズになる。この形は安土城の黒金門で完成した織豊系縄張りの虎口の基本形である。

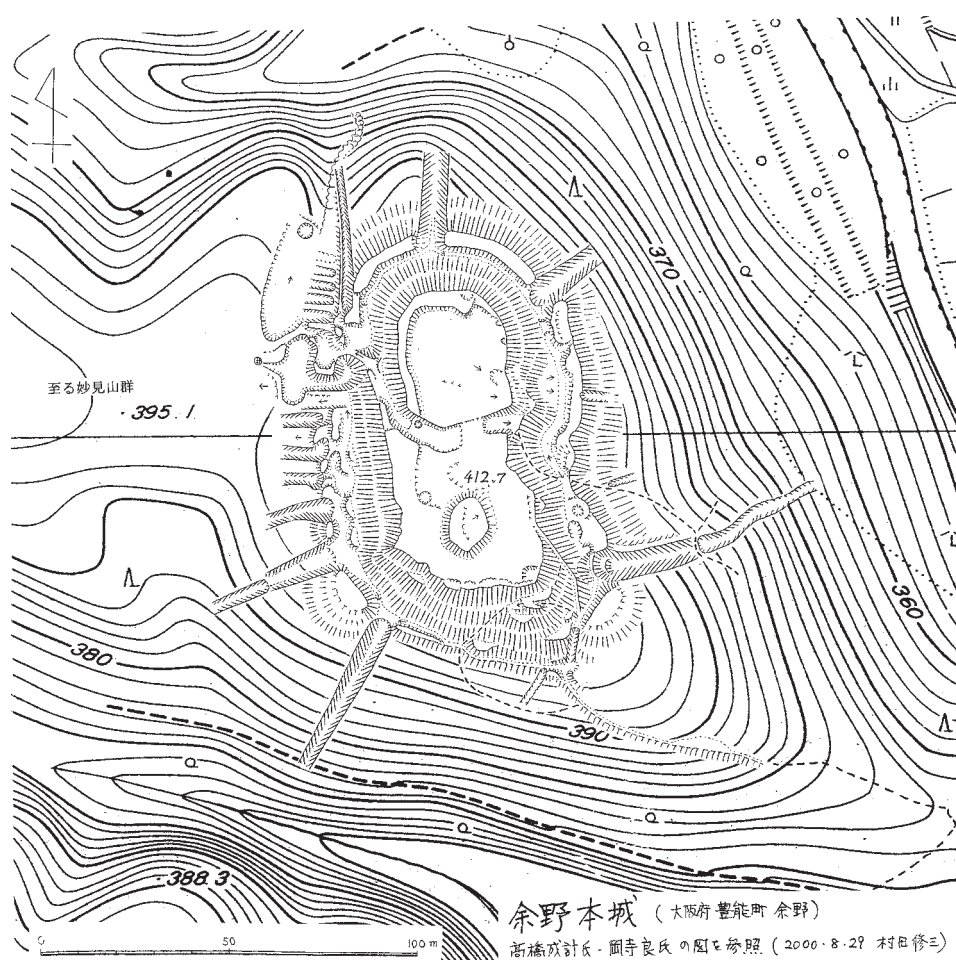
千田嘉博氏が看破したように、この虎口（出入り口）の形は防御と出撃の両面に対応した構えになっている。³⁾ 攻守の矛盾を克服することを迫った軍事的環境は、総力戦体制の段階に突入した特定の戦国大名の下でしか想定し得ないので、攻守両面に強いこの種の虎口は織豊権力の登場以後のものとする向きが強かった。しかし武田氏支配領内の馬出し虎口、後北条氏領内の大横矢の虎口も同様の効果を追求し



第4図 中山の付城

たものだし、最近高田徹氏が総括した朝倉氏の若狭侵攻時の陣城群（浅井氏支援のため江北の諸城にも応用）の初原的な喰い違い虎口は明らかに安土城に先行するものである⁴⁾。列強によるこれら一連の軍事技術の変革は「虎口革命」と呼ぶことができる。織田氏が安土城で抜きん出るまでの十数年間のレースでは多様な個性的工夫が見られた。例えば朝倉氏の陣城群の一つ、中山の付城の北虎口は、開口部の喰い違いはわずかだが、導入路をカーブさせて喰い違い効果を発揮している（第4図）。

止々呂美城の虎口は塁線をカーブさせることで喰い違い効果を増す工夫をしたのかもしれない。とは言ってもこの地域の勢力が「虎口革命」を強いるような軍事的環境に置かれたとは思われないので、織豊政権によって総括された「虎口革命」の知識に在地的な工夫を加えただけと見た方がよいだろう。参考までに、近郷に所在する余野本城は、戦国末期の工夫の多彩さで注目されているが、西側の出撃専用虎口は馬出しの前後の導線にひねりを加えて効果を増している（第5図）。止々呂美城にひねりの技法が導入された時期は、川辺郡の塩川氏と能勢郡の能勢氏による南北対立の決着する天正14（1586）年



第5図 余野本城

末を下限とするが、それより10年は遡らないだろう。しかしこの土塁・空堀の構築以前から能勢氏側（一族の余野氏）が交通の要衝を押さえる簡単な砦を設けていた可能性はある。

余野川沿いの街道（近世の摂丹街道）の最大の難所を西に見下ろす要衝の丘を能勢氏側が押さえる砦（境目の城）を確保する上で、丘上のダラダラした平坦地形は広すぎる。最高所に必要最小限の曲輪を確保すればよい。東方に長く続く尾根方向を効率よく遮断して防御することが肝心で、西方の尾根先は多少だらけていてもその下の山腹は急斜面なので人工を加える必要はない。こういう判断から最終的に出来上がったのが現在確認できる縄張りのようである。西方は低い切岸が設けられているだけで、その先は次第下がりの自然地形である。城域内の北側がやや高いので東西方向にも切岸が設けられ、城内は3区画以上に仕切られている。神社関連のゴミ穴その他の攪乱があって明確な曲輪構成は確認しがたいが、北側に主郭が位置したようである。主郭の東南部から西北へ土塁が食い込んでいるのは、前述した喰い違い虎口から迂回して主郭へ入り直す構えのようであるが、攪乱が激しいので確認は困難である。この土塁の頂部が城内の最高所なので、物見台のような施設が設けられた可能性もある。⁵⁾

通常の山城の姿からすると、収まりの悪い縄張りではあるが、地上観察では以上の判断に止めざるをえない。ダラダラ尾根の東側の発掘調査地は城域外と見るのが妥当と判断された。

2. 「遠構え」の発見

城跡中心部から鞍部を隔てて東方の発掘調査区の中央に聳える瓢箪形の高まり（周辺は字「岡ノ上」だが便宜上「瓢箪山」と仮称）の標高は231メートルで、城跡中心部より3メートル高い（城山の標高は空撮によるので、樹高を考慮すると5メートル以上か）。「瓢箪山」の裾には水路跡が走り、その水係り地以外は自然地形である。城山における縄張りが前述したように小範囲に限定されているので、尾根地形に依存した耕作地を隔てて聳えるこの「瓢箪山」が城跡と無関係ということになると、この先の尾根続きに城郭関連遺構を求めることは不可能と判断されざるをえない。水路跡は米軍の空中写真でも認められる水田を灌漑していた可能性が高いが、水田用に改修される以前に城の水の手として引水されたものかもしれない。そういう微かな期待を持って尾根部の調査の成果を待っていたが、結果は全く予想外のものとなった。

「瓢箪山」の南東の細尾根から二本の堀切が出てきたのである（第6図）。判断を誤った恥ずかしさを忘れて予想を裏切った成果の大きさに驚きと喜びを禁じえず、早速現場を訪れた。堀切は二本とも細い尾根幅に見合って幅・深さとも小規模だが、尾根両側が急峻で迂回できないので遮断機能は高い。城郭本体から遠く離れた場所に堀切などの防御施設があり、単独で城郭としての機能を発揮しえないようなものを、とりあえず遠構えと呼ぶならわしになっている⁶⁾。今回の遺構がこの遠構えの一種であることはまちがいない。

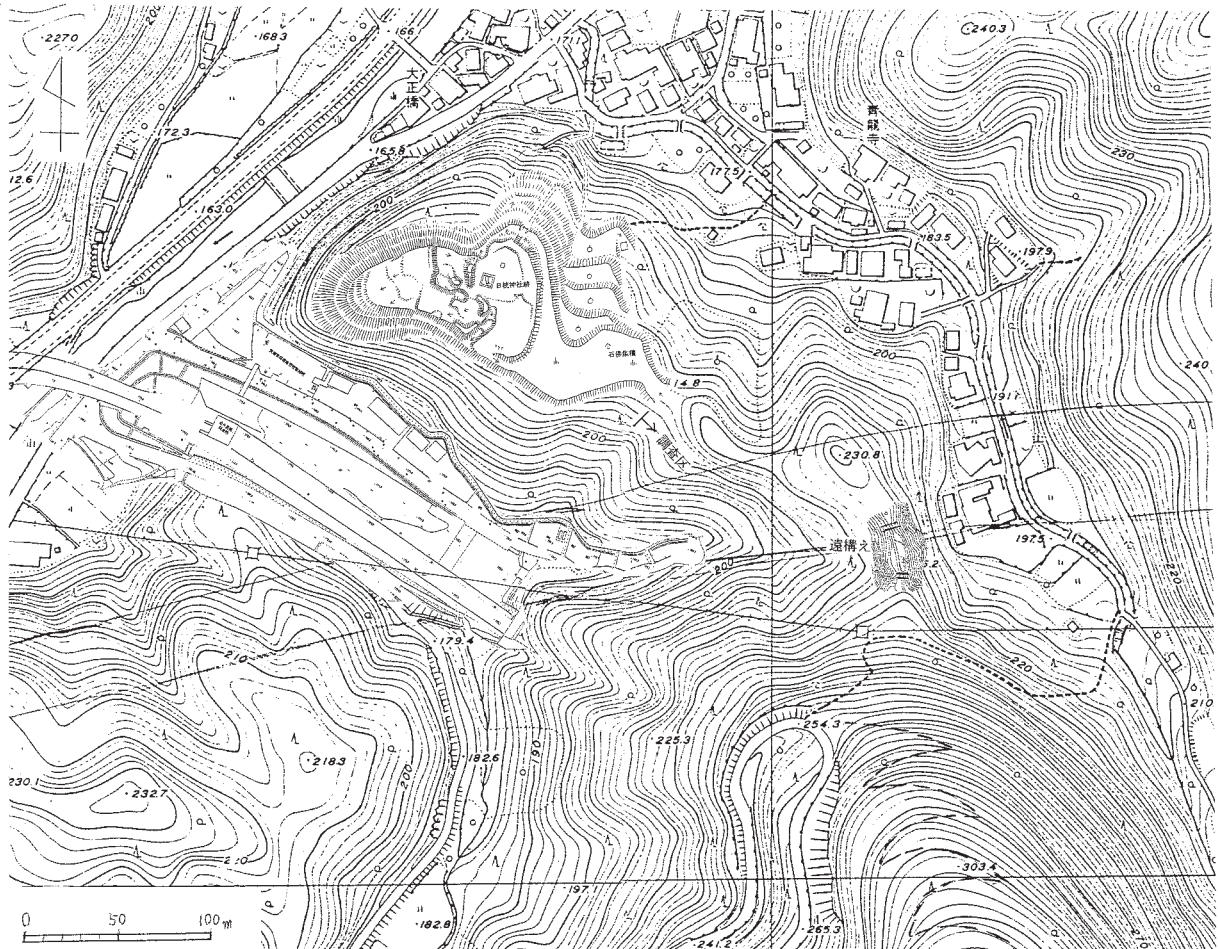
堀切が二本あるということについては、二つの解釈が可能である。北側の堀切は「瓢箪山」続きの高まりから南向きに構えて最初のくびれ部分に遮断線を設け、さらに南方、尾根の果てる際にもう一本遮断線を設けるといふ、二段構えの構想が一つである（並立タイプ）。二つ目は、二本の堀切に挟まれた22メートルの区間のやせ尾根を小さな陣地、尾根の付け根の隘路（中世文書に「切所」と記される防御ポイント）を押さえる足場として活用するための施設、という解釈である（陣取りタイプ）。いずれを採るかは土層断面図の解釈にも影響されるが、第2面（遠構えレベル）の測量図を見る限り、堀切とかみ合う土塁や陣取り用の削平段を設けた形跡は見出せない。その限りでは並立タイプと見るのが穏当だろう。いずれにしても尾根の付け根部分に異常な神経を注いでこの遠構えを築いたことがわかる。

遠構え一般の中で、今回の遺構が目を引くのは、城郭本体からただ離れているだけでなく、間に本体より数メートル高い「瓢箪山」が手付かずのまま介在して（妨げになって）いることである。本体を防御するためだけなら、せめて「瓢箪山」に布陣の仕掛けを設けるべきである。本体防御以外の重要な任務があればこそ、邪魔な岡を隔てた先方に手を伸ばさざるを得なかったと判断することができる。

3. 「道」遺構の発見

発掘調査では、当然のことながら、堀切検出に至る過程で、まず土層断面を確認し、一枚一枚剥ぎ取りながら、ついに成果をえたのであった。あらためてその資料の中から関連するデータを私なりに整理してみる。

遠構えの北側の堀切の北（断面図Iライン）と南（断面図Jライン）及び南側の堀切の北（断面図Kライン）の断ち割り土層から下層盛土が検出された。堀切はこの盛土層をカットして構築された可能性が高いので、堀切すなわちそれによって機能を開始した遠構え部構築以前に盛土造成されたと考えることができる。ところで、遠構え部を陣取りタイプと想定した場合にはその域外になるIラインにも同じ盛土が検出されたこと、また両堀切がそれぞれ個別に南向きに構えられている並立タイプと想定した場



第6図 止々呂美城と道

合には堀切作戦と関係のないはずのJラインにも同じ盛土が検出された。このことは下層盛土が遠構上部で期待される城郭関連遺構とは異なる次元の人工物であることを示唆する。何のための人工なのか。断面図の下層盛土から浮かび上がるこの構築物の形は、上端およそ一間幅の細長いものなので、道であった可能性が高い。地形が細尾根から山腹に転換した場所で取られた断面図Lラインで下層盛土が確認できなかったのは、この場所では道が山登り姿勢に転じていて、位置がずれていたからだと考えるとつじつまが合う。

やせ尾根の部分でわざわざ盛土して造成された道は単なる山道ではあるまい。周辺の地理を一見すると摂丹街道（余野道、池田道とも）との関係に気付く。池田から余野川沿いに遡上して亀岡に至る街道の最難所が久安寺（伏尾）から下止々呂美の間にある。久安寺の裏の屈曲部の断崖は近代の大工事までは通れず、伏尾から数百メートルの尾根越え道でつないでいた。その北にも絶壁が続くので、大事を取って伏尾から山腹を縫うバイパスが用意されていた。このバイパスが余野川に戻る地点が止々呂美城南下（箕面グリーンロードトンネルの口、字「今宮」）である。この山腹バイパスは山腹ゆえの崩落の危険があるので、いっそのこと池田から山（五月山）に登り尾根道で通り切ろうとするバイパスも使われた。途中に衣懸松の名所もあり、案外親しまれた道だったようだ。この尾根バイパスの下りつく場所が問題の発掘地点だったと考えられる。途中の山腹にはかなり踏み込まれたジグザグ道が残っている。この道は下止々呂美を見下ろす最高地点で高山道と勝尾寺道に分岐する。中世は能勢（余野）氏・塩川氏・高山氏・勝尾寺そして南の大物・池田氏などの諸勢力がこの道をめぐって複雑な動きをしたことだろう。⁷⁾

道が恵みよりも災いをもたらすものとなる戦国末期に、地形が大きく変わるこの場所で、問題の道は堀切で遮断された。しかし戦乱の際を選んで必要な物資と人員は通したい。上幅2メートル程度の小規模な空堀なので、隠し置いた材木を敷いて通行することもできただろう。

この道は「瓢箪山」を過ぎて「宮山」との地峡（発掘調査区西限）付近で坂を下り、下止々呂美の「奥ノ所」集落へ到着していたものと思われる。城に最接近した地点で押さえることも可能だが、取り逃がさないために尾根地形に降り着いたまさにその地点でキャッチしようとして、あえて「瓢箪山」が介在する遠方に遠構えを設けたわけである。

通してもらえない人は問題の場所を見下ろす20～30メートル上の地点から方向転換して西の谷（字「今宮」）へ降ろうと努力し、やがてこちらの方が本道になった。現在のドライブウェイがこのコースを踏襲している。その途中に前述の山腹バイパスが顔を出すので、当初からこちらへ下る道を用意しておいた方がよかったとも思われるが、「今宮」の川口から下止々呂美の「下ノ所」集落へ出るまでの城山の裾が難所だった（こういう難所に臨む要害地形だからこそ築城の意味があった）。河岸の難所を避けるためにこそ用意された山越えのバイパスだったので、細尾根から集落へ下るコースが選ばれたのである。それはともかく、時代が変わり、街道の機能を失った細尾根は気兼ねなしに盛り土されて耕地化され、さらにその灌漑のための用水路が通された。発掘調査で上層盛土と下層盛土が識別されたことにより、この道の劇的な歴史が判明したのである。

4. 小規模城郭の意外な機能

耕地開発以前の城山の山上は、だらだらしながら東西170メートル、最大幅60メートルあるので、標準規模の領域権力が気合を入れればかなりの大規模城郭に仕上げることができる。北摂でその規模に近い城は芥川山城を別格とすれば、山を越えて西の川西市の山下城、川辺郡北部を支配した塩川氏の本城だけである。それ以上の勢力を張ったと思われる池田氏は城下町経営を視野に入れた大規模な台地城郭を築いたので、山城には手を染めなかった。余野川流域に蟠居した余野氏の本家筋の能勢氏は、一族及び近隣の小領主を束ねて細川政権の一翼を担っていたが、彼らが競い合って能勢地方に築いた多数の城は、境目の山辺城を除いて基本的に単郭の（地形に応じて副郭を付属）小規模城郭である。そういう地域性の中で育った権力が塩川氏や池田氏と競い合って支配領域と交易ルートを確保するために止々呂美地区に橋頭堡を築こうとした場合、多少の地余りと縄張りの無理があろうとも、この止々呂美城は最適の立地であった。能勢地方の城郭群は縄張りの良さで注目されているが、それらと比べても上出来の作品ではあるまいか。しかも眼下の川沿いの道だけでなく、山越えの道に対しても十分な備えを用意していたとは！

城郭研究者の間では、小規模城郭を「村の城」論と関連させて、領主の城・支配権力側の城に対する村落住民の自主的な防衛の施設と評価する見解があるが、慎重に議論すべきである。城の規模の大小と築城主体の大小の関係は時と場合によって大きく変わる。小規模城郭論争の火付け役となった横山勝栄氏は、「村の城」と評価できる小規模城郭の地理的・歴史的環境を限定しながら論じた。足で稼いで提唱した立地論は「完結型集落」で、かなり納得できる事例を紹介している。⁹⁾多くの研究者の踏査事例を私流に総括すると、村の入り口を守る物見台的な砦を火の見櫓や「村の鐘」のように使うタイプと、平坦地形を粗放に扱った避難所（「山小屋」伝承地の諸例）のタイプに区別できる。横山氏が村の小規模城郭として紹介した事例の中には村の入り口を防衛する砦であるとともに、粗放な削平段を重ねる大規

模な平坦地形が避難所として使えるという、両タイプを兼ねた魅力的な事例もある。そういう場合はどう測っても大規模になる。「村の城＝小規模」のイメージは控えるべきだろう。

村を守る各種の城を維持できる自立的な郷村はたしかにあっただろうが、地域支配をめぐる軍事的対立が激しくなるに従って、そういう「牧歌的な」風景は存続できなくなるのが現実である。北摂は武田・上杉・後北条等がぶつかりあった東国ほどではなかったとしても、三好氏が京畿を席卷して将軍が都に居られなくなる16世紀後半になると、大小の地域権力の領域固めの争いは激しさを増した。「完結型集落」の存立を許さない（世知辛い）畿内周辺では、能勢地方のように小領主の一揆的連携によってのみ小規模城郭の競い合う状況が見られたが、そのような世界でも軍事的緊張の激化を受けて縄張りが強化され、一層村人の手の届かぬ存在に転化したようである。

止々呂美城の地理的環境は「完結型集落」とは対極にある交通の要衝である。しかし軍事的対立が激化する以前の世知辛いだけの時勢においては、逆に「稼げる」場所だったと言えなくはない。喰い違い虎口を形成すると思われる土塁に近接して主郭に横たわる土塁は、前述したような内部仕切り兼櫓台として機能しえたが、そのためだけに築かれたのかどうか疑問が残る。これがなくてもこの小規模な城は十分機能を果たしているからである。もしかして以前からあった遺構の再利用ではないのか。喰い違い虎口は織豊系の知識を学んだ後の作品だと想定したが、だとすると戦国最末期になる。それ以前にこの要衝に築城しなかったはずはない。だっ広い平坦地を持って余し、最高所に物見台を築き、その回りを単純に仕切り回すような単郭の城があったかもしれない。曲輪として防御しきれない平坦地は避難所として活用できなくはない。もとよりその当時の「瓢箪山」南方の細尾根に遠構えはなかったはずだが。

余野川地峡に臨むこの要衝の地は、16世紀後半になると能勢氏ないしその傘下の余野氏か、あるいはそれを追い詰めた塩川氏や池田氏以外に築城することは不可能である。しかしそれ以前なら止々呂美村の在地の勢力が「村の鐘」のように活用することは不可能とはいえない。「村の城」論者が主張するような大名・領主以外の築城主体をこの村から排除する自信はない。ただ止々呂美城の現在認められる縄張りと言入りの遠構えはどう見ても広域支配を争った地域権力の作品である（前身の素朴な縄張りの時代でも「村の城」の可能性は限りなく低い）。ではこの城以外に城跡が見つかったらどうなのか。素朴な縄張りの在地の城があってもいいのではなかろうか。そういう疑問に突き刺さったのが『大阪府全誌』の記すもう一つの「止々呂美城」であった。探索の結果、それは無いと分かった今、この地に「村の城」を見出すことは一層困難だと言わざるをえない。止々呂美城の主体部を発掘調査する機会が訪れる日までこの課題は封印せざるをえないだろう。

今、たしかに言えることは、道路建設から外されて残ったわずかな城跡の遺構が、北摂で最も斬新な縄張りを残しているということである。あらためて小規模城郭に秘められた歴史の面白さに興味が増す。戦国期の多様な城郭分布と縄張りの分析から判明したことは、戦国の諸階層に関わった小規模城郭に、最終段階の作戦と築城技術の罅迫り合いが反映しているということである。止々呂美城跡はそのような戦国末期の縄張り発達の片鱗を残すだけでなく、城と道という重要テーマに類例の無い話題を提供してくれた貴重な事例である。それも粘り強い発掘調査によってかろうじて確認できたのであり、その意味でもかけがえのない事例というべきである。

〔註〕

- 1) 1981 『日本城郭大系』12(大阪・兵庫) 新人物往来社
- 2) 井上正雄 1922 『大阪府全誌』巻之三 大阪府
- 3) 千田嘉博 2000 『織豊系城郭の形成』 東京大学出版会
- 4) 高田 徹 2013 「越前朝倉氏築城術の一考察―若狭国国吉城付城を中心として―」『中世城郭研究』27
- 5) 原地形の最高所はこの地点より少し東方にあったかもしれないが、この曲輪まで殆ど等高であったと見てよい。西へ向って下り始めるこの地点が、街道監視の城としては、最適の立地となる。
- 6) 著名な事例として静岡県牧野原台地の諏訪原城がある。古絵図に城の南方「五六丁」を隔てて空堀と土塁を組み合わせたラインが台地を遮断している姿が描かれ、その痕跡が現在も確かめられる。なお、多様な規模と形態を有する遠構えを城域に含めるかどうか、議論出すと果てしがないので、「作戦域」という概念を加えて処理すればよいと思う。止々呂美城の場合、当初私は眼下の街道を監視する小規模城郭・砦のイメージだけで処理しようとしていたので、「城域外」だからと東方のやせ尾根を軽視して恥を掻いた次第である。
- 7) 前註で私は「恥を掻いた」と書いたが、恥ずべきは隠された堀切に気付かなかったことではなく、「城と道」という大問題を忘れていたことだと言い直さねばなるまい。堀切探しについては宝くじレベルの話で、分厚い盛土に覆われた上に、水路のフェイントをかまされたやせ尾根の中から堀切が出てこようとは、神ならぬ身の知る由もなかった。調査開始直前に現場を訪れた私は、「絶望的な」状況で調査に入る調査員が気の毒でならず、近代の水路を確かめるのも無意味ではない、などとつぶやくだけだった。しかし、手抜きせずに調査を敢行した「報奨」は大きかった。丁寧に層序を追っていたので、堀切が出たレベルで上層盛土と下層盛土の識別ができた。これが決定打になったのだが、堀切検出に驚くだけの私はまだこの「識別」の重大さに気付いていなかった。この「識別」を発掘区通して検討できるデータがきっちり取られていたので、堀切に直接関わる城郭遺構以外の遺構、道の可能性に後日気付くことができたのである。山越えパイパス云々の話もその時点から考え始めたことだった。それまで摂丹街道はこの城の眼下を通るものという常識しか持ち合わせていなかった。余野川沿いのバス道の難所が開削されたのが1922年だということもそれ以後に知った。本文の章別構成が発掘順と合わないのは、私の認識順を優先したからである。
- 8) 高橋成計 1990 「中世城郭と土豪―多田・能勢地方の場合―」 私家版
中西裕樹 1997 「摂津国能勢郡西郷・東郷における中世城館構成―築城主体の性格と『小規模城館』―」『中世城郭研究』11
岡寺 良 1999 「摂津能勢郡の戦国期城館にみる築城・改修の画期」 大阪大学考古学研究室編『国家形成期の考古学』
- 9) 横山勝栄 1988 「新潟県北部の中世の小型城郭について」 三川村立三川中学校『研究紀要』
同 1995 「新潟北部の城郭」 第12回全国城郭研究者セミナー「村の城を考える」資料集